

金助。これはいらつしやいまし、お支度でございますか。
吉五郎。おい、早く頼むよ。

(吉五郎は下手の門に入る。このもやう宜しく、宿場めいた流行唄にて道具廻る。)

(111)

本舞臺はもとの奥座敷。香ねぎの石には三次とおもんの草鞋と草履が揃へてあり。

(こゝに三次とおもんは座蒲團の上に住ひ、前に膳をならべてお留が酌をしてゐる。流行唄にて道具止まる。)

おもん。店が忙しいであらうから、こゝには構はずに行つてください。

お留。では、御ゆつくり召上つて下さりませ。

三次。用があれば手を叩くから、遠慮なしに店へゆくがよい。

お留。御免くださりませ。

(お留は庭傳ひに下手の奥へ入る。)

三次。だん／＼江戸へ近くなつたせるか、酒の味もよくなつた。肴もこゝらは悪くねえ。

おもん。意地の穢ないことばかりお云ひでないよ。江戸へ這入ると旨いものをたんと食べさせて上

けるよ。だが、食べるものばかりぢやない。旅へ出ると江戸のありがたさが沁々知れるね。

三次。小半年も江戸を離れると、無性に故郷が戀しくなる奴さ。それだから江戸者は意氣地がね

えな。

(ふたりは酒を飲んでゐる。下手の庭傳ひに、金助を先に立て、つゞいて五八出る。そのあとより馬士の六藏のほかに長作と彌十の二人、いづれも百姓のこしらへにて出る。金助は縁に腰をかけ、一同は庭にひざまづく。)

金助。旦那様、先刻は失禮をいたしました。その節お話しのお年貢金のおとし主、早速に方々を

聞き合はせまして、やう／＼探し當てました。

おもん。そんなら落し主は知れましたか。(三次と顔をみあはせる。)こんな嬉しいことはござりませぬ。

三次。して、その落し主といふのは誰であつたな。

金助。へい。この五八と申す者でござります。五八どのや。さあ、これへ出てお禮を申せ。

三巴雪夜話

五八。

(前に出る。)旦那様、ありがたうございました。御代官所へ納める御年貢金を、村の衆からあづかりまして行く途中、どこで落したか些ともわからず、その申譯には首でも縊るか、身でもなけるか、所詮生きてはゐられぬと泣いてばつかり居りました。(涙をぬぐふ。)
それがあなた様のおかげで無事に戻りましたので、それはそれは生き返つたやうに喜んで居ります。

金助。

三次。

六藏。

長作。

彌十。

おもん。

三次。

金助。

おとし主が早速に知れて拙者も安堵。その五八とやらが確かに落し主に相違あるまいな。へい、へい。それはわたくし共が證人、決して嘘いつはりは申上げませぬ。
これは村でも正直五八と綽名を取つて居ります者。
決して間違ひはござりませぬ。

かうして皆が證人に立つからは、よもや嘘でもござりますまい。念のために受取の一札を書かせて、金をお渡しなされては如何でござります。なるほど、いつはりとも見えぬ。然らば此金を戻してつかはずぞ。

(三次は懷中より封金を出す。金助うけ取る。)

ありがたうござります。これで落し主の命が助かるばかりでなく、村中一同が助かります。

みんなも能くお禮を申せ、お禮を申せ。

四人。

ありがたうござりました。

三次。

さて番頭。その金を戻すについて、拙者よりも些と頼みたい儀があるが、なんと聞いてはくれまいか。

おもん。

あ、もし、あなた……。(袖をひく。)

三次。

さあ、近頃申しにくい儀ではあるが、われくは浪々の身の上、これより故郷の江戸へ歸るについても、もはや一錢の貯へもなく、はなはだ難澁いたして居るが……。そこで何うであらう。百兩といふ金を無事に戻した禮金……と申すも如何であるが、いくら拙者に貰ひたいと思ふが……。

おもん。

はて、町人百姓に向つて、そのやうなさもしいことを……。

金助。

いえ、判りました。わかりました。拾ひ主に禮金をさしあけるは世間一統の習はし、さう仰しやるは御道理のことです。なう、皆の衆。

六藏。

それはお武家様の仰しやる通りだ。五八どのにも異存はあるまい。

五八。

わたくしの命が助かりましたお禮、決して兎やかうは申しませぬ。して、なにほど差上げ

たら宜しうござりませう。

三次。いくらと申して相場もないもの、そちたちの料簡次第にいたして呉れ。

金助。先づ五分か一割ぐらゐが普通でござりませうか。

六藏。そんなら寧ろ一割として十兩差上げてはどうだな。

おもん。あの十兩……。そのやうに多分の禮金を受けましては……。

金助。はて、よろしうござります。萬事はわたくしどもにお任せなされて下さりませ。では、失禮ながらこの中から……。

(金助は封を切らうとすれば、三次は衝と起ちあがりて、その封金を取り返し、金助の襟上をとらへる。)

三次。さりとはおのれ不埒の奴。これ、考へてもみろ。この金は何々村御年貢金と記して、封印までもしてあるを、おのれが勝手に封を切つて村方一同に云ひ譯が立たうと思ふか。禮金は別に差出し、この金は封のまゝに受取つて歸るが當然なるに、おのれ等二三人の一存にて勝手に封を切らうとするからは、察するところ、彼はまことの落し主でない。え、おどろく。

三次。いつはつて落し主をこしらへ、この百兩の金をかたり取らんとする巧みと見た。かへすがへすも憎い奴。この土地にも町役人もあらう、村役人もあらう。おのれ等一々に引縛つて

引渡すからさう思へ。(屹と云ふ。)

金助。あゝ、もし。眞平御免くださりませ。これ、五八どの。六藏どの。なんとか云ひ譯をして呉れぬか。

(四人も顔を見あはせてうろくしてゐる。)

三次。さあ、拙者と一緒になるれ。どいつもみな騙りの徒黨だ。一寸も動くな。

(金助の襟上を取つて起たうとするを、おもんは止める。)

おもん。まあ、まあ、そのやうな手暴いことを……。これは町人達の巧みと云ふでもござりますまい。大方はなんの氣も付かずにしたこと。

六藏。奥様のおつしやる通り、まつたく何の氣も付かずに致したことに相違ござりませぬ。

金助。かたりなどとは以ての外、どうぞ御勘辨くださりませ。

五八。わたくしも共々にお詫び申し上げます。

三次。そのやうに詫びるとあれば免しても遣はさうが、唯今この封印を切らうといたしたは、ま

つたく何の氣も付かずに致したとか。

一同。

それに相違ござりませぬ。

(三次は金助を突き放す。一同はつとする。)

金助。

(汗をふく。)では、その十兩は唯今あらためて持参いたします。何とぞしばらくお待ち下さりませ。

(金助は早々に下手に入る。)

六藏。

奥様、とんだ御心配をかけまして、なんとも申譯がござりませぬ。あなた様から旦那様へよろしくお取りなしを願ひます。

おもん。

連合は正直一途の氣性、かりにも曲つたこと、見れば些とも容赦せぬが日頃の癖、今のことは何と云うてもお前方の不行きとゞき、これからは氣をつけませうぞ。

一同。

へい、へい、恐れ入りました。

三次。

由なき金を拾つた爲に色々の面倒、金を拾ふは禍を拾ふに等しとはよく云つたものだ。

金助。

(下のかたより金助は急ぎ出づ。)

りませ。

(紙に包みし金を恐るゝ差出せば、三次は檢めてうなづく。)

三次。

十兩の禮金たしかに受取つた。しかし念には念を入れよと云ふことがある。一金百兩也、右封印のまゝ、請取申候といふ一札を書いてくりやれ。

金助。

かしこまりました。唯今あちらで書いてまゐります。

六藏。

では、わし等もあつちへ行かうか。

五八。

旦那様、奥様。

四人。

ありがとうございました。

三次。

(一同は挨拶して、金助と共に下手に入る。それを見送りて、ふたりは膝を崩す。)

おもん。

おい、おもん。一杯ついでくれ。

三次。

あいよ。(酌をする。)

おもん。

商賣も樂ぢやあねえ。

三次。

随分暇つ潰しをしたね。

おもん。

随分暇つ潰しをしたね。

三次。

大きな聲をしたので喉が渴いた。

三巴雪夜話

おもん。

ほんたうに假聲つかひはなか／＼骨が折れるね。

(云ひながらおもんは落ちてゐる珠数の玉に眼をつけて拾ふ。)

おもん。

おや、おや、こんなものが落ちてゐるよ。

三 次。

珠数玉らしい。大師まゐりの客が落して行つたんだらうよ。

おもん。

珠数が切れるなんて、あんまり縁起がよくないね。

三 次。

どうだ。それも二兩か三兩ぐらゐるに使ふ工夫はねえか。

おもん。

常談ぢやあない。随分慾の皮があつたねえ。

(ふたりは笑ひながら飲んでゐる。上手の縁傳ひに横網の吉五郎出づ。)

吉五郎。

どうも見たやうな影法師だと思つたら、やつぱりお前達だつたな。

おもん。

あら、兄さん。どうしてこんな處へ來てゐたの。

三 次。

兄い、久振りだつたな。まあ、こつちへ來てくんねえ。

(吉五郎は座敷に入る。三回はさかづきを獻す、おもんは酌をする。)

おもん。

なるほど兄さんは大師様御信心だつたつけねえ。すつかり忘れてしまつた。

吉五郎。

大師様にやあ限らねえ。おらあ神佛と名の付くものは皆んな信心する。その御功德でかう

して無事に生きてゐるんだ。いや、御功德と云やあ、お前達は大層な功德をしたやうだな。

三 次。

それぢやあ今のを聞いてゐなすつたか。

吉五郎。

だが、あんまり褒めるわけにも行かねえ。どうで碌なことぢやああるめえから。

おもん。

こりやあ御挨拶だねえ。わたし達だつて、たまには善い事も仕様と云ふものさ。

吉五郎。

嘘をつけ。手前達が百兩の金を拾つて、素直におとし主へ返す風か。小一年遇はねえから

色々聞きてえこともあるが、こゝでぐ／＼してゐちやあ拙さうだ。どうで江戸へ行くんだらう。足もとの明るいうちに早く歸れ。

三 次。

そんなにびく／＼するにも及ばねえ。實は二人は草鞋をはいて、とんだ夕露の文句だが、

去年の暮から丸一年、二年越しに京大坂を、うろ付き廻つてゐましたのさ。

おもん。

故郷忘じ難しとやらで、どこへ行つても江戸が戀しく、もうほとほりも冷めた頃と、こんな野暮ななりをして、うか／＼こつちへ歸つて來ると、こゝでお前に逢ふと云ふのも、大

師様のお引合せか。

吉五郎。

やい、やい、勿體ねえことを云ふな。こんなところへ引合ひに出されると、大師様はうし

三巴雪夜話

ろをお向きなさらあ。は、は、は。

(下の方にてわや、云ふ聲がするに、三人は下のかたを見る。)

吉五郎。なんだ。思にさうくしいな。喧嘩でも始めたか。

おもん。喧嘩かしら。(三次の顔をみる。)

三次。奴等はすぐに封を切りやあがつたな。

吉五郎。それ、みろ。手前達の渡した金はどうで満足なものぢやああるめえと思つてゐたが、手妻の種がすぐにあらはれて、飛んだ唯今のお笑ひ草か。智慧のねえ奴等だな。

三次。さう安つほく云ひなさんな。三年立ちやあ三つになる。こゝらの百姓どもに嚇かされるやうな俺達でもねえのさ。

おもん。こゝにゐると面倒だから、お前は知らん顔をしてそつちへ行つてゐてお呉んなさいよ。

吉五郎。それぢやあ、まあ彼方へ行つて、手前達の掛合振を見てみようか。かう見えても俺あ白生帳面の横網の吉五郎だ。手前達がどちを組んでも、おらあ加勢にやあ出ねえから、決して恨みなさんなよ。

三次。兄いに加勢を頼むほどなら、かうして二人で乗込んで来やあしねえ。奴等がいくら騒いだ

ところで、ずんど瑣細の内証事だ。

おもん。お構ひなくと、彼方へ行つて、わたし達の腕がどのくらゐ上つたか、まあ黙つて見てゐて

お呉んなさいよ。

吉五郎。大きなことばかり云やあがつて、不安心でならねえ。

(吉五郎は再び上のかたに入る。ふたりは酒を飲んでゐる。下のかたより以前の金助を先に、六藏

五八、長作、彌十出る。六藏等は鉢巻をして手に棒などを持つ。)

三次。はて、さわがしい。大勢で何しにまゐつた。さつきの一札はまだ書けぬか。

金助。え、悪くおちついた面をするな。人を騙りの何のと云つて、貴様達こそ大がたりだ。こ

六藏。れ、この金をみる。(封を切つたる金を縁さきに投げ出す。)

五八。贋銀つかひの大がたりめ。さあ、俺達と一緒に代官所へ来い。

一同。いづく云ふと縛りあけるぞ。

さあ。立て、立て。

(大勢はわやく云ふ。)

三次。もう斯うなつては致し方がござらぬ。浪々のたつきなさに、思ひ付いたる悪巧み。

おもん。これも一時の出来心、どうぞ御勘辨くださりませ。

(二人は手をついておとなしく詫がる。)

金助。こつちの店も客商賣、繩付を出したくもないから、あやまるならば免しても遣らうが、今渡した十兩の禮金を耳を揃へてすぐに返せ。

おもん。折角ですが、其お金は……。

六藏。なに、返せねえと云ふのか。

おもん。一旦人に遣つたものを、返せといふのは返し泥坊と、小さい子供でも云ひまする。

金助。なんだと……。

おもん。一旦お貰ひ申した以上は、どうもお返し申されませぬ。

(皆々は顔を見あはせる。)

金助。いや、はや、呆れたづうくしい奴等だ。うぬ等のかたりが露顯して、兩手をついて謝つてゐながら。

五八。かたつた金が返せぬとは、あんまり蟲の好い奴等だ。

六藏。面倒だ。縛れ、縛れ。

長作。彌十。

さうだ。さうだ。

(皆々立ちかゝらうとする。)

三次。え。さうくしい奴等だ。手前達のやうな判らずやを相手にして、行儀好くしちやあるられねえ。(あぐらをかく。)なるほどこゝにゐる二人は、確かにかたりだ。盗人だ。なかは何にも白紙に、封印をした御年貢金、路で拾つた振りをして深切ごかしに落し主を、探すと云ふのはこつちの狂言。

おもん。見事に一ぱい食はされたが、お前達の因果といふもの。たとひ騙りと露はれても、一旦こつちへ貰つたものを、素直に返して堪まるものかね。大師みやけの達磨とは、些と出来が違ふから、轉んでも唯は起きないんだよ。

(二人はよろしく思入。)

金助。いよく呆れて物が云へぬ。こんな圖太い奴等に勘辨も容赦もない。さあ、引縛つて突き出すが可い。

四人。さうだ。さうだ。

(四人は縁へばらくと上る。)

三 次。まだ騒ぐのか。うるせえ奴等だ。これほど云つて聞かしても判らなけりやあ、突き出すとも何うとも勝手にしろ。だが、その前に少し手前達に断つて置くことがある。なるほど俺達は悪いに相違ねえ。拾ひもしねえ金を拾つたと云つたのは悪かつた。どんなお仕置を受けても仕方がねえが、落しもしねえ金を落したと云つて、百兩の金をかたり取らうとした奴等がこゝらには大勢ある。

一 同。

や。

三 次。おれが騙りなら、そいつ等も騙りだ。

一 同。

や。

おもん。ほんたうにさうだ。拾ひもしない金を拾つたと云ふのが騙りなら、落しもしない金を落したと云ふのも騙りだ。罪の重い軽いはない筈、わたし達を縛る前に、その人達を縛つちやあどうだね。

一 同。

や。(顔を見あはせてゐる。)

三 次。さあ、縛つてくれ。突き出してくれ。

一 同。

え。

おもん。なにをぐぐくしてゐるんだね。それとも黙つて歸す氣かえ。

金 助。だと云つて……。

三 次。それぢやあ騙りの仲間入りをして、俺達と一緒に抱かれて行くのか。

金 助。さあ。

三 次。おれ達は明るいうちに江戸へ這入るのだ。先をいそぐから早く返事をしろ。

(三次は屹と云ふ。皆々困つてゐる。上手より吉五郎出づ。)

吉五郎。お隣が何だかさうぐしいと思つて、そつと覗いて見ましたら、何かこぐらかつたお話の様子。こゝで事を暴立て、は何方の爲にもなりません。差出がましいやうですが、わたしに任せて下さいませんか。

三 次。して、任せろと云ひなざるのは……。

吉五郎。兄い、氣の毒だが、先刻うけ取つた十兩の中から、半分こゝへ出してお呉んなせえ。

三 次。え。半分出せ。(吉五郎の顔をみる。)

吉五郎。どうぞ器用に出しておくんなせえ。

おもん。おまへさん、出すのかえ。(三次の顔をみる。)

三次、仕方がねえ。出しやせう。(五兩出して)して、この五兩を何うしなさるのだ。さすがは悪黨だ。出しつ振が豪勢好いや。もし、番頭さん。わたしの扱ひだ、半分だけで

我慢して遣つてお呉んなさいまし。

金助、色々ありがたうございました。(金をうけ取る)とは云ふものゝ見すく、あとの五兩を、無理に遣らうと云やあしない。それで不足なら置いておいでよ、

おもん、え、黙つてゐる。女のくせに色氣のねえ、般若のやうな面をするな。兄も定九郎を止

吉五郎、めにして、おとなしく和睦しちやあ何うだね。

三次、相手がぐづく云はねえなら、まあ料簡して遣りませうよ。

吉五郎、これでこつちは先づ納まつた。そつちも好加減に切上げちやあ何うですね。

六藏、こんな奴等にかゝり合つたのが此方の不運だ。

金助、思へば思へば……。

三次、なんだ、

往生際の悪い幽霊だ。退散、退散。

吉五郎、(吉五郎は手をふる。一同も顔を見あはせて、ぼんやりしながら下手に入る。金助もあとから行きか

おもん、かるを、おもんは呼び止める。

おもん、もし、番頭さん。お前さんがあの中軍師らしいから、お骨折賃にこれをあげますよ。(珠

金の玉を出す。)

金助、(立戻りて手を出す。これは珠數玉だね。

おもん、(笑ふ)珠數玉でも水晶ですよ。貰つて置いて損はないやね。

金助、いくら水晶でも、珠數玉ぢやあ嬉しくないな。

(金助は珠數玉を手の掌にのせて眺めながら、下手に入る。)

吉五郎、なるほど、あの番頭も慾が深えな。

おもん、加勢をしないといふ約束なのに、兄さん、おまへは出て来たんだね。

吉五郎、だから、手前達の加勢はしねえ。あつちの加勢をして、せめて半金を取返して遣つたんだ。

おもん、人を馬鹿にしてゐないねえ。おかけで五兩唯取られた。大師様のお引き合せも的にやあな

らな。久しぶりて歸つて来て、江戸の玄關でもうこれぢやあ、あんまりつけが好くない

やうだ。だが、まあ、相手がお前ぢやあ喧嘩にもならない。さあ、お酌でもしませうかね。

吉五郎、もとく唯取つた金だ。半分返したところが損にもなるめえ。(おもんは酌をさせて飲む。)

つきはまだ云ふ間がなかつたが、見りやあ二人とも乙ななりをしてゐるな。女は野暮な大丸鬚、男は大小をぶつ込んで、どういふ筋立か知らねえが、おでこ芝居の見つともねえ真似も、もう好加減にしちやあ何うだ。このごろは兩國でもあんまりそんなのは流行らねえぜ。

(吉五郎はさかづきを下に置く。合方になり。)

吉五郎。

今のかけあひの様子ぢやあ大分腕も上つたらしいが、いくら年功を積んだと云つても、こればかりやあ自慢にならねえ。人間はなんでも見切が肝腎。久しぶりで江戸へ歸るのを切っかけに、草鞋と一緒に悪い料簡を、思ひ切りよく捨てなせえ。本来ならばお前達と兄弟の縁をきる筈だが、小言を云ひく、附合つてゐるのも、やつぱり親身の妹が可愛いからだ、縁につながる三次さん、お前も元は武家出だから、理窟はおれ達よりも知つてゐる筈だ。今更七くどい御説教はしねえ。手つ取り早く云つてみりやあ、悪いことは止めるもんだぜ。なにが面白くつていつまでもそんな事をしてゐるんだ。

三次。

そりや兄いの云ふ通り、これでも以前は小身ながら、御直參の黒鍛組、横田三次郎といふ侍が、三拍子揃つた道樂から、たうとう我身を持崩して、黒鍛三次といふ肩書附。

おもん。

わたしも兄さんの丹精で、どうやら斯うやら哥澤の、名取りにまではなつたけれど、習ひおほえた三味線よりも、こゝろの駒が狂ひ出し、女だてらにゆすり騙り、哥澤おもんといふお尋ね者。

三次。

考へて見りやあつまらねえ話だ。久しぶりで歸つて來たのが、丁度切りかへ時かも知れねえ。なあ、おもん。

おもん。

堅氣になつたら又面白いことがあるかも知れない。こゝは兄さんの意見について、料簡を洗ひ直して見ようかねえ。

吉五郎。

お前達の云ふことだから、ほんたうか嘘か知らねえが、兎も角もさう云つて呉れれば、おれも心持が好いと云ふもんだ。まあ、なんとかして安心させてくれ。

(時の鐘きこゆ。)

吉五郎。

おゝ、ありやあ大師の八つだらう。このごろは大分日がつまつたから、早くしねえと江戸へ這入られねえ。

三次。

違えねえ。もうそろく出掛けようぜ。一緒に出ちやあ拙いから、お前たちは一足先へ行きねえ。

吉五郎。

三巴雪夜話

おもん。いづれ其内(そのうち)にたづねて行きますよ。

三次。ぢやあ御免(ごめん)なせえ。

(三次は草鞋(わらじ)をはき、おもんは草履(ぞうり)を穿く。)

吉五郎。弟(あとうと)もお前のことを案(あん)じてゐるから、今度(こんど)來たらば呼んで逢(あ)はせて遣(や)らうよ。

おもん。刀屋(かたなや)の娘(むすめ)には先刻(さつき)そこで逢(あ)ひましたよ。

吉五郎。やつぱり大師(だいし)まると見えるな。

(このうちに三次は草鞋(わらじ)を穿いてしまひ、おもんと一緒に庭(にわ)に降りる。)

三次。それぢやあ兄(あに)い。ゆつくり江戸(えど)で逢(あ)ひませうぜ。

吉五郎。へん、鈴ヶ森(すずがき)の臺詞(たいし)のやうだな。まあ、二人(ふたり)とも。(たち上(あ)がるを道具(たぐい)替(か)りの知らせ。氣(き)をつけ

て行きねえよ、

(三次とおもんは下手(しもて)へゆきかゝる。吉五郎(きちごろう)は見送(みおく)る。道具(たぐい)廻(ま)る。)

(四)

もとの店先(みせさき)の道具(たぐい)。

(店先(みせさき)には以前(いぜん)のお留(おとど)お秋(あき)が店先(みせさき)を掃(は)き、水(みづ)を打(う)つてゐる。)

お留。なんだかあの二人(ふたり)づれは可怪(おかし)なお客(きやく)だね、

お秋。番頭(ばんとう)さんはあの人達(ひとたち)と喧嘩(けんか)でもしたらしいんだよ。

お留。道理(だうり)でなんだか膨(ふ)れつ面(つら)をして、あたしに餘計(よけい)な小言(こごと)を云(い)つてゐるたつげ。

(下手(しもて)の門(かど)のうちより三次(さんじ)とおもん出(い)づ。)

お秋。もうお歸(かへ)りでござりますか。

三次。勘定(かんぢやう)はこれで取(と)つてくりやれ。剩錢(つり)はお前達(まへたち)につかはすぞ。(銀(かね)を出す。)

二人。ありがとうございました。

おもん。どうも御世話(ごせわ)になりました。もし、あなた、草鞋(わらじ)の紐(ひも)が……。

三次。お、急(いそ)いで結(むす)んだせるか、すぐに解(と)けた。

(三次は床几(しやうじ)に腰(こし)をおろして草鞋(わらじ)の紐(ひも)をむすび直(な)してゐる。上(かみ)のかたより以前(いぜん)の駕籠(かご)昇(あ)り四人(にん)が二挺(にたい)の駕籠(かご)をかつき、駕籠(かご)にはお花(はな)とお竹(たけ)が乗(の)つてゐる。)

お秋。先刻はありがとうございました。
 お竹。さきほどは御厄介になりました。
 お秋。またお寄りくださりませ。

(二挺の駕籠は下手に入る。三次はちつとあとを見送る。)
 見れば見るほど好い女だ。

三次。お前はあの娘ばかり気にしてゐるんだね。

三 次。御成道の刀屋の娘か。(ひとり言。)

おもん。まだあんなことを……。それだからお前は油断がならないと云ふんだよ。

(おもんは三次を抓る。三次は氣がつく。)

三 次。え、痛え。なにをするんだ。

(店の中には番頭金助が鹽を持ちて窺ひゐる。下手の門のうちより吉五郎出て来りて二人の様子をみる。)

吉五郎。へん、往來中で見つともねえ奴等だな。

(云ひながら下手へ行きかゝる。二人はびつくりして極りの悪き思入。金助は竊と二人のうしろか

ら鹽花を振りまく。この模様よろしく、宿場の流行唄にて賑やかに。)

幕

第二幕

(一)

本所横網河岸の網船屋。

本舞臺一面の平ぶたい。上のかたに九尺の二階、障子を閉めてあり。正面の上のかたは二枚の押入れ、つゞいて出入りの暖簾口、下手は鼠壁にて竹の子笠または叉手網などをかけ、いつものところに世話木戸。下手はあとへさげ勝手口のこゝろにて、障子に釣網船宿と大きく記してあり。下手は路地のこゝろにて木戸を閉めてあり。

(十二月なかばの夕ぐれ。上手の長火鉢の前に亭主吉五郎は藁の半纏を引つけて座蒲團の上に坐

り、煙草をのんでゐる。下手に船頭伊之助、寅松のふたりは、腹がけ、長半纏、三尺帯にて、又手綱を締つてゐる。うすく浪の音、端唄にて暮あく。

伊之助。べらぼうに寒くなつて来たぜ。

寅松。ひるすぎから急に冷えて来たから、こりやあ雪の下地かも知れねえ。

吉五郎。どうも今夜あたりはあぶねえな。

伊之助。今夜は降りますよ。きつと請合、降りますよ。

寅松。だが、雪といふ奴は、二三日催してからでなけりやあ降らねえもんだぜ。

伊之助。なに、そんなことがあるもんか。今夜はきつと降るといふのに……。

吉五郎。伊之、手前はひどく強情を張るが、手前の請合はあんまり的にならねえぜ。

伊之助。こればかりは請合ひます。だつて、けふは十二月の十四日だもの。

吉五郎。なるほど、吉良の屋敷の討入か。本所だけに一番洒落れたな。は、は、は。

伊之助。時にさつきから裏の長屋で端唄を流つてゐるのは、どこの娘だね。

吉五郎。お辰さんの所の親類の子ださうだが、なんでも近いうちに柳橋へ出るんだとか云ふこつた。

伊之助。(むき直る。)へえ、そりやあ好い女かね。

寅松。お前に云ふとまた騒ぐから黙つてゐようよ。藝者に出ると云ふんだから、いづれ女にやあ

違えねえのさ。

伊之助。意地の悪いことを云はねえで教へてくんねえよ。え、まだ若えのかい。

吉五郎。え、また始めやあがつた。女の事といふと、すぐに眼の色を變へやあがる。めづらしく

もねえ、好加減にしる。だが、あの三味線もまた好加減にすりやあい、な。朝から休みな

しに騒々しくつてならねえ。

伊之助。だが、雪のふる晩にしんみりと端唄も悪くねえな。ねえ、あの端唄を聞きながら、一杯や

つたら好いだらうね。

吉五郎。もうそろ／＼催促を始めやあがる。おれもなんだか薄ら寒くなつて来た。伊之の御指圖に

したがつて一杯やるかな。

伊之助。ありがてえ、すぐに買つて来ませうか。(起ちあがる。)

吉五郎。いや、手前を手に遣ると、酒屋の店の者と喧嘩なんぞしてゐて埒があかねえ。寅、手前行

つて二升ばかり取つて来い。

寅松。

あい、あい。(奥に入る。)

伊之助。

親方、今夜は二升も奢つておくんなさるのかえ。

吉五郎。

手前にみんな飲ませるんぢやあねえ。今夜は客がありさうだから、いつもよりも少し餘計に取つたのだ。

伊之助。

なんのこつた。つまらねえ。

吉五郎。

は、愚癡つほく云ふな。都合によると、今夜はうんと飲ましてやるから、そのつもりで早く仕事を片付けてしまへ。あ、裏の三味線もいつの間にか止めたと見えて、い、鹽梅に静になつた。

(伊之助は又手を繕つてゐる。吉五郎は煙草をのんでゐる。刀屋の番頭十兵衛は手代半七を連れて出づ。)

十兵衛。

兄さんにはわたしが好いやうに云つてあけるから、決して心配しないが可い。

半七。

はい、ありがたうござります。

(ふたりは門口に來り、半七は先に立つて門をあける。)

伊之助。

お、半七さんか。(起ちあがる。)

おい、親方。備前屋の番頭さんが來なすつたぜ。

吉五郎。

お、どうぞこつちへお通り下さい。

(捨臺詞にて十兵衛を請じ入れる。伊之助は押入より座蒲團を出して十兵衛にすゝめる。半七はおづ／＼下手に坐る。)

吉五郎。

冬場になると夜網も少なく、わたくしどもの商賣は休み同様、毎日ぶら／＼遊んでゐながら、つい御無沙汰ばかり致しまして、まことに申譯がございませぬ。

十兵衛。

それでも節季師走はどこでも忙しいもの。わたしの方でも御無沙汰をしてゐました。早速ながら今日この半七を連れて來たのは、すこし込み入つた相談があるので……。

吉五郎。

なんでござりますか、お使を下さればわたくしの方から伺ひますのに。

十兵衛。

いや、店では少し話にくいことなので、おかみさんとも相談の上で、わたしが自身に連れて來ました。と云ふのはこの半七、暇を出すのではないが、しばらく此方へあづかつてお賞ひ申したいので……。

(伊之助は奥から茶を持って出で、十兵衛に出す。)

吉五郎。

へえ、それぢやあ何か弟めがしくじりでも致しましたか。

十兵衛。

しくじりと云ふわけでもないが、實は家のお花さんとね。

吉五郎。え。ぢやあ弟の野郎がお嬢さんと……

伊之助。へえ。それぢやあ半さんがあのお花さんと……。む、なるほど、お染久松、お夏清十郎、よくある筋だ。おい、半七さん。うまく遣つたね。

吉五郎。やい、やい、あと先をみて物を云へ。番頭さんの前でうまく遣つたとは何のこつた。黙つてゐろ。(叱りつけて十兵衛に向ひ) 弟めが飛んでもないことを致しまして、なんともお詫の致方もございませぬ。重々恐れ入りました。ございませぬ。

十兵衛。これが世間に例のない事でも無し、今更叱つたとて仕方もないやうなもの、何をいふにも大勢の奉公人の手前、たゞこのまゝに捨て、置いては店の取締りも付かず。知つての通り、備前屋はおかみさんが女あるじ、うるさい世間の口もあれば、猶更嚴重にしなければならぬので、兎もかくも一旦は半七を宿へ下けて、また折をみて呼び戻すとしませうから、なんにも云はずに引取つてください。

吉五郎。よく判りました。どうもいろいろ御心配をかけて相済みませぬ。

伊之助。いよく野崎村の段と相成つたね。さしづめ親方は久作の役廻りだ。

吉五郎。え、又しやべるか。引込んでゐろ。(半七を見かへり) やい。半七、手前途方もねえこと

をしやあがつたな。

十兵衛。いや、かならず叱つてくださるな。水の出端といふ若い同士、もし取りつめて短氣でも起しては却つて悪い。

伊之助。さうですとも、出来たものは仕方がねえや。ぐづぐづ云ふのはあんまり野暮だ。

吉五郎。え、黙つてゐると云ふのに……。 (睨み付けて) では、もう何にも申しますまい。弟はわたくしが預かりまして、決して門端へも出しませんから、どうぞ御安心くださいまし。

十兵衛。今伊之さんのいふ通り、出来たものは仕方もないから、いづれ御親類の方々とも相談して、きつと夫婦になられるやうに、及ばずながら私も取計らひませうから、些とのあひだの辛抱をね。

吉五郎。いろく御深切にありがたうございます。やい、伊之。もう薄暗くなつた。早くあかりで

も點ける。なにをほんやりしてゐるやあがるんだ。

十兵衛。いや、もうさうしてはゐられませぬ。では、兎も角も人ひとり、あづかつて置いて下さいまし。わたしはこれでお暇をませう。

吉五郎。お忙しいなかをわざわざ恐れ入りました。

(伊之助は履物を直す。十兵衛は門に出る。)

十兵衛。半七。

半七。はい。

(半七は門口に来る。十兵衛はその顔を見る。)

十兵衛。からだを大事にしなさいよ。

(思入あつて門をしめる。半七はあとを見送る。十兵衛は向うに入る。)

吉五郎。

半七。はい。(下手に住ひて。)兄さん、どうも申譯のないことを致しました。

吉五郎。今あらためて云ふでもねえが、俺達のおふくろは若えときに、あの備前屋に奉公してゐたのを、死んだ旦那の媒酌で、こつちの家へかたづいたのだから、まあお主筋と云つた仲だ。

手前までが其縁で、虻蜂とんほの時分から、あのお店へ奉公して、これまで悪い噂もなく、

まじめに辛抱してゐるのは、若い者にはめづらしいと、おれも腹ぢやあ褒めてゐたのに、

飛んだしくじりをしやあがつたな。

伊之助。おい、おい、親方。さうやかましく云ふことはねえ。なにもこれが盗み騙りをしたと云ふ

吉五郎。

半七。はい。ぢやあなし、戀に上下の隔てはねえと、芝居の臺詞にもある通りだ。もし向うで不人情な

ことでもしやあがつたら、構ふことはねえから店へ捻ぢ込んで、思ふさま文句を云つてや

るが可い。半七さん、その時にやあ私も加勢をしますぜ。

手前ぐらゐ出しやばる奴も少ねえもんだ。馬鹿正直の半七につまらねえ智慧を付けてくれ

るな。だが、まあ、今更叱つても取返しは付かねえ。當分は内におとなしくしてゐろ。

吉五郎。二階へ行つて、ひさしぶりで姉にでも逢つて来い。

半七。え、あの姉さんが……。

吉五郎。む、五六日前からおれの家に轉け込んでゐる。一度は手前をよんで逢はせて遣らうと思

つてゐたんだ。丁度好いと云ふのもなんだが、手前の來たのが幸ひだ。まあ久し振りで顔

でもみせて来い。

半七。あの二階に……。

吉五郎。さうだ。くはしい話は姉から聞け。

半七。では、御免くださりませ。

寅松。 (半七は上手の二階にあがつてゆく。奥の暖簾口より寅松は行燈をとぼして出づ。)

親方、奥で聴いてみました、とんだ心配なことが始まつたね。

吉五郎。 さうでなくつても妹のことで、好加減に氣を痛めてゐるところへ、重ねぐのこの始末だ。察してくれ。

寅松。 さう云ふときにやあ酒に限るぜ。すぐに燗を付けようか。

伊之助。 ちけえねえ。燗は俺がするから、お前はそつちで膳ごしらへをして呉んねえ。

寅松。 よし、よし。

吉五郎。 (伊之助と寅松は奥に入る。時の鐘きこゆ。)

もう六つだな。節季になつたらべらほうに日がつまつた。

伊之助。 (伊之助は奥より徳利を持って出で、表をのぞく。雪ちらちら降る。)

たうとう白いものが降つて来た。

吉五郎。 降つて来たか。今夜は積るだらうな。

(吉五郎はよろしく思入。伊之助は徳利を鐵瓶に入れて燗をする。裏長屋にて唄ふ。ころにて、下座の端唄になる。)

唄 わが物と思へば輕し傘の雪。

吉五郎。 また彼奴が弾き出したか。

伊之助。 人の氣も知らねえで、いけ騒々しい奴だ。だが、悪い聲ぢやあねえ。

唄 戀の重荷を肩にかけ、妹が行けば冬の夜の、川風さむく千鳥鳴く。

(この文句に薄く雪の音をかぶせて刀屋の娘お花は蛇の目の傘をさして出で、あとさきを見ながら門をのぞく。)

お花。 御免なさい。(小聲で云ふ。)

伊之助。 え、誰だい。(立つて門をあける。)

や、備前屋のお花さんぢやありませんか。

吉五郎。 なに、お花さんだ。

(二階の障子をあけて半七窺ふ。吉五郎は二階をみかへりて半七と顔を見あはせ、半七はあわて、障子をしめる。)

吉五郎。 やい、伊之。お嬢さんを入れちやあいけねえ、断つてお歸し申せ。

伊之助。 だつて、わざくお出でなすつたんだぜ。

吉五郎。 わざくでも何でも入れちやあいけねえ。弟は俺があづかつて、一足も外へ出しません

と、備前屋の番頭さんに請合つた。その口の乾かねえうちに、こつちへお嬢さんを引摺り込んぢやあ、何ほなんでも義理が立たねえ。(外へ開えるやうに云ふ。)

お花。

それはわたしも察してゐますから、決して長くとは云ひますまい。後生ですから半七をちよいとこゝまで……。

伊之助。

え、親方。ちよいとで好いと云ふんだが……。どうだらう。

吉五郎。

ちよいとでも何でもいけねえ。今逢つちやあおたがひの爲にならねえと、わけを云つてお歸し申せ。

伊之助。

でも、この天氣に御成道からわざ／＼逢ひに來たんだぜ。

吉五郎。

え、手前の知つたことぢやあねえ、風の這入らねえやうに、戸をびつしやりと閉めて置け。何をぐ／＼してゐるやあがるんだ。飯を食つてゐる人間のやうにはつきりしろ。

伊之助。

そんなにがみ／＼云はなくつても可いや。(お花にむかひて。)お嬢さん、親方はあの通りで一旦云ひ出したら肯かねえんだから、けふはまあお歸んなせえ。

お花。

いえ、いえ、いつまでもこゝに待つてゐます。
唄 待つ身につらき置火燵。

(伊之助は早く歸れといふ思入、お花は忌だと頭をふる。)

吉五郎。

おい、伊之。早く閉めてこつちへ來い。

伊之助。

え。

吉五郎。

え、早く來い。

(吉五郎は屹と云ふ。伊之助は仕方無しに門をしめて火鉢の方へ來ようとする。)

お花。

それでも一目……。(門をあけて這入らうとする。)

伊之助。

あ、いけねえ。

(伊之助はあわて、お花を突き出して、門をびつしやりと閉める。)

伊之助。

親方、仕様がねえよ。

唄 實に遺瀨がないわいな。

(伊之助は持餘してゐる。唄の切れ、雪おろしにて、雪はげしく降る。黒鐵の三次、竹の子笠をかぶり、赤合羽を着て忍んで出る。お花は人影をみて、小蔭にかくれる、三次は門に來る。)

三次。

御免ください。

伊之助。

はい。(門をみて。)どなたでございませう。

三次。(笠をぬぐ)親方はゐるかね。

伊之助。へえ。(不思議さうに見てゐる。)

吉五郎。(覗いて。)お、三次ぢやあねえか。まあ、這入るが可い。

三次。お、兄い。たうとう降つて来たぜ。

(三次は合羽の雪を拂ひ、内に入りて草鞋をぬぐ。奥より寅松は着をのせたる膳を持ち出て出づ。)

寅松。おや、お客様かえ。

吉五郎。いや、かまはねえ。丁度いゝ所だ。すぐにこゝへ持つて来い。燗の方はおれが引受けるや

ら、伊之も寅も奥へ行つて勝手に飲むが可いや。

二人。あい、あい。

(伊之助と寅松は奥に入る。三次は長火鉢のまへに坐る。)

三次。べらぼうに寒いね。

吉五郎。燗はいゝ頃だ。寒さ凌ぎに一杯やんねえ。(猪口をさす。)

三次。こりやあ何よりありがてえ。

(二人は飲みはじめる。)

三次。

先々月川崎の茶屋で、兄に意見されながら、急に生まれ變るといふわけにも行かぬえの
で、江戸へ歸ると早々に、おもんを玉につもたせ、それから二三度小ゆすが、すぐに
世間の眼について、長え正月は無ささうだから、よんどころなく思ひ切つて、もう一度草
鞋を穿くつもりよ。

吉五郎。

つもたせに小ゆすり位なら、重い科にもなるめえが、それから積る糞疵が一度にばれて
来た日にやあ、首が二つあつても足りめえ。さうして、今度はどつちへ伸すんだ。

三次。

東海道はもういけねえ。今度は一つ向きを變へて、越後か奥州路へふみ出すつもりだ。雁
鴨でさへ江戸へ来る時分に、江戸から逆に北をむいて、冷え雪のなかへ飛び込むのは、あ
んまり氣のねえ道中だが、どうで遊山の旅ぢやあねえ。まあ我慢して些とのあひだは熊と
一緒に穴籠りだ。

吉五郎。

五六日前におもんが轉け込んで来て、所詮江戸にやあゐられねえから、もう一度旅へ出る
つもりだと、お前の来るのを待つてゐる。だが、よつほど氣を付けねえと、江戸を出るま
でが險難だぜ。

三次。

しつかりしてゐるやうでも、女といふ奴は足手纏ひ、おもんを連れて江戸を出るのは餘つ

吉五郎。ほど用心しにやあなるめえ。千住を出るまでが大事のところだ。ぢやあ寧そかうしたら何うだ。おれが船を仕立て、遣るから、大川を上手へ上つて、千住の橋下へ着けたらよからう。

三次。さうしてくれりやあ有りがてえ、陸を行くのはあぶねえと、些とびく付いてるたんだが、船で行きやあ大丈夫だ。陸と違つて人の氣がつくめえ。

吉五郎。おまけに今夜は雪が降つてゐるから、苦を貰いて行きやあ、行火を抱いて行かれるくらんだ。ぢやあ家の奴に云ひつけて、船の支度をさせるから、まあ二階へ行つておもんに逢つて来ねえ。

三次。逢つても別に用もねえが……。

吉五郎。往來中でさへも巫山戯てゐるくらゐだ。五六日逢はなかつたら用もあるだらう。瘦我慢をしねえで早く行つて来ねえ。

(二階より半七降りて来る。)

半七。入らつしやいまし。(三次に挨拶する。)

三次。(挨拶して。)こりやあどなただね。

吉五郎。おもんの弟よ、

三次。む、半七さんと云ふのか。わたしは黒鞆の三次といふもので、なにぶんお心安く願ひます。

吉五郎。おい、半七、三次さんがこれから二階へ行くから、お前は奥へ行つて夕飯でも食つてしまへ。それから伊之の野郎にちよいと来いと云つてくれ。

半七。はい、はい。(奥に入る。)

三次。おとなしさうな若え者だね。

吉五郎。む、意氣地がなくなつて仕様がねえ、

三次。あれが御成道の刀屋に奉公してゐるのか、

吉五郎。よく知つてゐるな、

三次。む、さうか。(思入あつて。)ぢやあ、ちよいと二階へ行つて来るぜ、

吉五郎。すぐに船の支度をさせよう。

三次。何分たのむぜ、

(三次は二階へ昇つてゆく。)

吉五郎。

妹と云ひ、弟といひ、揃ひも揃つて兄きを泣かせやあがる。あんな兄弟を生み付けた親父やおふくろが恨めしいくらゐだ。

(伊之助はすこしく酔つて出づ。)

伊之助。

おい、親方。なにか用かね。

吉五郎。

客人があるからすぐに船を仕立て、くれ。

伊之助。

この雪のふるのに……。白魚でも捕りに行くのかね。

(吉五郎は囁く。伊之助うなづく。)

伊之助。

む、なるほど。そりやあ大仕事だ。(手拭で鉢巻きをする。)
なに、大丈夫、きつと大橋下まで送つてみせるから、親方、安心しなせえ。

吉五郎。

雪のふるのが幸ひだ。苦を賣いてくれ。

伊之助。

合點だ、合點だ。

(伊之助は奥に入る。三次は二階の障子をあけて聲をかける。)

三次。

おい、兄い。少し相談があるんだ。顔を貸してくんねえ。

吉五郎。

む。

(吉五郎も二階へあがつてゆく。小藤よりお花再び出で、そつと門をあけて窺ふ。奥より半七も左を窺ひながら出づ。)

半七。

お花様か。

お花。

お、半七……。(内にかけて込む。)

半七。

もし、静かになされませ。(あたりを見まはして。)
お前様がたづねてお出でなされたを、さつき二階で知つてゐましたが、何分にも人目があるので、うっかり出るにも出られず。この雪のふるのに、いつまでも門に立つて、さぞお寒うござりましたらう。(お花の袖の雪を拂つて遣る。)
まあ、こつちへお出でなされませ。

(半七はお花を火鉢の方へ連れてゆく。)

お花。

かうして尋ねて来たは外でもない。どこへなりともわたしを連れて……。

半七。

え、連れて退けとおつしやりますか。

お花。

出来たものなら仕方がない、かならず半七と添はせて遣ると、阿母さんも頼もしさうに云つては下さるが、それにしても一旦は遠い親類へあづけるといふ相談。遠い親類とおつしやるのは、もしや信州の叔父様のところへ……。

半七。

三巴雪夜話

お花。その叔父さんのところへ、一年ほども預けて置くといふ相談を、おとなしく聞いておられるか。たとひ二人が引分けられても、おなじ江戸にゐるならば、まだ辛抱の仕様もあらう。

半七。お花。をぢ様のお家は信州小諸、江戸から四十里もあるとやら。

半七。お花。(泣く) そんな遠い田舎へゆき、毎日江戸の空をながめて、くよくよ案じてゐるよりも、いつそ死んだが優しであらう。今更おもへばこの間、川崎の茶屋で逢つたときに、わたしの珠数が切れたのも、かうした悲しいことになるといふ、大師様のお告げであつたか。そんなことかも知れませぬ。それにしても突きつめて、死ぬのなんのとは飛んでもないこと。お前様に若しもの事がござりましたら、おふくろ様や御親類中に、半七がなんと申譯がござりませう。

お花。そんなら一緒に連れて退いてたもるか。

半七。お花。ぢやと申してお前様を、連れて行かうにも的は無し。

お花。わたしが死んでも構はぬか。

半七。お花。どうしてそんな勿體ない。

お花。どんな難儀もわたしは厭はぬ。一旦かうして出たからは、再び備前屋へは歸られぬ。

半七。たとひ何とおつしやつても、江戸から十里と踏み出したことのない半七が、お前様を連れてどこへ行かれませう。

お花。行かれるところまで行つた上で、かなはぬ時は二人一緒に……。

半七。え。

お花。わたしやこれほどに思つてゐるのが、おまへの胸には通じぬのか。

(お花は泣く。半七は思案に暮れてゐる。この以前より三次は二階を出て、階子の中途に立ち聴きゐたりしが、この時つかくと降りて来る。)

三次。これ、お二人。

(二人はびつくりして、お花は下手へ飛び退く。三次はまん中に坐る。)

三次。お花。はて、びつくりなさることは無い。わたしはこの半七の姉の亭主。夫婦連れで奥州の方へ行かうと、今夜その相談に來た所。おい、半七さん。今聞いてゐりやあお嬢さんは、よく思ひ詰めてゐるなさる様子だ。それを打ちやつて置くのはあんまり不人情だらうぜ。さあ。それを思はぬではなけれども、なにをいふにも路用は無し、どこにも頼る方は無し。それは心配しなさんな。どうで私等はこれから旅へ出る先だから、一緒に連れて行つて遣

らうちやあねえか。

半七。あの、一緒にお連れ下さりませんか。

三次。兎もかくも江戸を離れてから、また相談の仕様もあらうと云ふものだ。悪いことは云はね

えから、今夜すぐに立ちなせえ。

半七。ほんにこれが地獄で佛とやら。

お花。え、ありがたうござります。

(ふたりは手をあはせる。三次はお花をちつと眺めてゐる。)

半七。さう云ふことならすぐに支度をして……。

三次。(氣がついて。)さうだ。しかし私等は千住まで船で行くつもりだから、別に支度にも及ぶま

い。兄貴に見つけられると面倒だから、お嬢さんは表から、半七さんは裏口から、別々に

こゝを出て、河岸へ行つて待つておくんなさい。わたしもやがてあとから行きませう。

お花。そんなら半七。

半七。お花様。

(お花は又寄らうとするを、三次は隔てる。)

三次。はて、あとでゆつくりお話しなせえ。お、兄貴が二階から降りて来るらしい。二人とも

に早く、早く……。

(これにてお花は表へ、半七は奥へあわてゝ入る。雪いよく降る。二階より吉五郎と哥澤おもん

が降りて来る。)

おもん。(表をのぞく。)おや、おや、大變に降つて来たねえ。三次さん、今夜は寒いよ。

三次。寒いくらゐるは仕方がねえ。どうで命がけの仕事だ。(徳利を取つて。)やあ、すつかり冷くな

つてしまつた。

(三人は火鉢の前に坐る。)

おもん。爛々までも好いから一杯貰はうぢやないか。なんだか寒くつて胴ふるひがするやうだ。

もう斯うなつちやあ意氣地がないね。

三次。大分年寄じみたことを云ふな。

おもん。もうお婆さんだもの。

(ふたりは酒を飲む。)

吉五郎。おい、寅。もつと酒を持つて来い。

三巴雪夜話

寅松。 あい、あい。

(寅松は徳利を持ちて奥より出る。)

吉五郎。

伊之はどうした。

寅松。

河岸へ行つて船をこしらへてゐます。

吉五郎。

よし、よし。

(寅松は奥に入る。吉五郎は徳利を鐵瓶に入れる。)

吉五郎。

いくら改心しろと云つても、さう根性が腐れ込んだらやあ、二人ともに所詮堅氣にやあなれめえから、どこへでも行つて勝手な真似をするが好からうよ。だが、なんと云つても親身の仲だ。お前達が繩つきで、やれ傳馬町へ送られたの、やれ鈴ヶ森へ牽き出されたのと、そんな噂を聞くのが辛えから、どうぞ當分は江戸へ足踏みをしてくれるなよ。

おもん。

そりやお前に云はれなくつても、わたしも疾うから其覺悟さ。所詮堅氣になれないと、見切りを付けたら寧ろそのこと、人の知らないところへ行つて、勝手な真似をした方が、氣兼遠慮がなくつて好いのさ。

三 次。

あんまり遠慮をする風でもねえが、もうかうなつたら仕方がねえ。堅氣になつたら出直し

て、兄いのところへも禮に來ようが、そいつは些とむづかしい。先づこれが一生のお別れかも知れねえよ。

おもん。

(おもんは懷中より短刀を出し、髪の毛をすこし切りて、紙につゝみて吉五郎の前に出す。)

おそかれ速かれどこかしらで、御用の聲をきいた日にやあ、一度と娑婆のないわたしだから、これがほんの生形見。御邪魔でもあらうが御佛壇の隅つこの方へでも入れて置いて、けふを命日に御線香の一本ぐらゐは供へてください。

吉五郎。

哀れつほいことを云ひ出したな。悪黨がそんな涙脆いことを云ふやうになつちやあ運の盡だ。おい、爛が付いたぜ。熱いところを一杯やつて景氣を付けろ。

(吉五郎は猪口を出す。おもんは酌をして貰つて飲む。)

おもん。

ほんたうにわたしも意氣地が無くなつたねえ。このごろは毎晩忌な夢ばかり見て、なんだか無暗にさびしくつてならないんですよ。

(猪口を吉五郎に戻して酌をする。このうちに三次は黙つて起ち上り、ついと奥に入る。ふたりは氣が注かす。)

吉五郎。

そんな弱いことを云ふなよ。悪黨の加勢をするわけぢやあねえが、兄弟と思へば色々々に氣

を揉んで、一日でも壽命をのばして遣りてえと、祈つてゐるのが人情だ。これから江戸を立退いて、どこで正月をするか知らねえが、三次と二人で仲よくして、めでたく雑煮を祝つてくれ。

おもん。兄さん、おまへの深切は忘れませんよ。(ほろりとする。)

吉五郎。それ、それが意氣地がねえと云ふんだ。とは云ふものゝこの寒空に。

おもん。花のお江戸をあとにして、果白河の陸奥へ。

吉五郎。さまよひ歩く憂旅も、かさなる悪事の身に積る。

おもん。雪の底やら垂氷の中、凍る思ひを我慢して。

吉五郎。花さく春に逢はれるか。

おもん。春を待たずに消えてしまふか。

吉五郎。生きるも死ぬも運次第。

おもん。それもこつちの心柄。

吉五郎。思へば因果な。

おもん。もし、兄さん。

吉五郎。身の上だなあ。

(ふたりは顔を見あはせてよろしく思入。奥より寅松出づ。)

寅松。もし、親方。船の支度は出来ました。

吉五郎。おま、さうか。おや、三次はいつの間にか何處へ行つた。

寅松。もう一人の人は裏口へ廻つてゐますよ。

吉五郎。流石はあいつだけに素早えな。おやあ、おもん。お前も支度をしろ。

おもん。あい。ちやあ、兄さん。お別れにもう一杯。(猪口をさすを道具替りの知らせ。取替つこをしませうよ。)

(おもんは吉五郎に酌をする。雪おろしにて道具廻る。)

本舞臺向う一面に五尺ほどの二重にて石垣のこゝろ。正面は武家屋敷の塀をみたる雪持の夜の遠見。二重一面に雪布を敷きつめ、河岸のよきところに雪持の枯柳の立木。上のかたに板戸二枚を閉めたる渡し小屋。平舞臺は大川のこゝろにて、岸寄りには枕が澤山に植ゑてあり。下のかたには苫をかけたる船一艘ありて、河岸より船へ板を渡してあり。すべて雪持の道具よろしく、浪の音、雪おろしにて道具留まる。

(雪はげしく降る。船頭伊之助は蓑笠にて出で、小屋をのぞく。)

伊之助。暮六つでいつも渡しは止まるんだ。おまけに今夜はこの雪ぢやあ老爺も家へ歸つて寐てるのだらう。誰もほかに見てゐる者はねえ。

(上のかたよりお花と半七は手拭をかぶり、手をひかれて出づ。)

伊之助。お二人さん、船はもう出来てゐます。すぐにお乗んなせえまし。

半七。さあ、お花様。

(ふたりは船の方へ来る。)

お花。どうやら怖いやうな。

伊之助。なに、大丈夫でござえます。ぢやあ、わたしが手を曳いてあげませう。

(伊之助はお花の手をひき、板を渡りて船に入る。)

お花。半七、早う來や。

半七。唯今まゐります。

(半七もつゞいて板を渡らうとする時、渡し小屋のなかより三次うかゞひ出で、不意に半七を川へ突き落す。)

お花。あれ。(驚く。)

伊之助。やい、やい、誰だ、何をしやあがるんだ。

(三次は無言にて船へ飛び込む。)

三次。さあ、船を出せ。

伊之助。常談云つちやあいけねえ。あぶなく土左衛門の出来るところだ。

(伊之助は川へ這入らすとするを、三次は捉へる。)

三次。え、そんな奴はかまはねえ。早く船を出せ。(短刀をぬいて突き付ける。)

伊之助。え、おどかしちやあいけねえ。

(伊之助は三次を突き放し、隙を見て川へ飛び込む。お花もつゞいて飛び込もうとするを、三次は又

捉へる。

三次。これ、騒ぐな。騒ぐとこれだぞ。この光つたものが見えねえか。

お花。ええ。(顫へる。)

三次。忘れもしねえ先々月、大師まわりの下向路で、ふつと見そめた刀屋の、娘に今夜めぐり逢ひ、深切ごかしに連れ出したも、野郎を川へ突きおとし、女を攫つてゆく魂膽。もう斯うなつたら仕方がねえ。忌でもあらうがこの三次と、乗合船で一緒に行け。

お花。ええ。

三次。棹を持つてもまんざらの素人ぢやあねえ、流されるやうなことはねえから安心しろ。ええ、意地を悪く降りやあがるな。

(短刀をくばへて棹を抜かうとする。上のかたよりおもん忍んで出づ。)

おもん。三次さん。

三次。(ぎつくりして。)え。

おもん。今の水音はなんだらうね。

三次。杭でも倒れて落ちたんだらうよ。さあ、なんでも可いから早く乗れ。

おもん。いゝえ、うっかり乗るまい。突き落されちやあ大變だからね。

三次。なんだと……。

おもん。わたしは道連れを断るから、お前は刀屋の娘さんと、行きたいところへ勝手においでよ。だが、わたしにも料簡があるから、おまへが千住へ着くころには、御用の網が張つてあると、初めから覺悟をするが可いよ。

(云ひすて、引返して行かうとするに、三次は短刀を銜へたまゝ慌て、岸へかけ上り、無理におもんを曳き戻す。)

三次。これ、つまりねえことを云はねえで、おたがひに先を急ぐ身體だ。早く船へ乗れといふのに……。

おもん。訴人をされるのがおそろしさに、だまして連れて行く氣でも、お前のやうな薄情な男と一緒に行くのは忌さ。お前はそこに好い道連があるぢやあないか。(船のなかのお花を指さす) そんなことを云はねえで……。

おもん。忌だよ、忌だよ。(捉られた手をふり拂ふ。)

三次。ぢやあ、どうしても行かねえのか。

三巴雪夜話

おもん。と云つたら、おまへはわたしを殺す氣だらうが、土橋の累と一緒ににはならないんだよ。さあ、殺せるなら殺して御覽。

三 次。もう仕様がねえ、望み通りに殺してやる。

(三次は短刀をふりあげると、おもんは飛び退く。)

おもん。お前、ほんたうにわたしを殺す氣かえ。いくら米が高くなつたつて、女房の口まで滅すにも及ぶまいぢやあないか。

三 次。悪く洒落れやあがるな。

(又切つてかゝれば、おもんも短刀をぬく。)

おもん。こつちこそ弟のかたきだから唯は置かないよ。

(雪はげしく降る。ふたりは雪の中にてよろしく立廻り、このうちに吉五郎は提灯を持ち、竹の子笠をかぶりて出て、透し見しておどろく。)

吉五郎。おい、おい、どうしたんだ。まあ、あぶねえ。待て、待て。

(吉五郎は止めようとする。二人も猶も立廻り、その中におもんは誤つて吉五郎を切る。吉五郎倒れる。おもん驚いて寄らうとすると、ころを、三次はその胸を突く。おもんも倒れる。)

三 次。この間に早く……

(船へ行かうとすれば、おもんは這ひ寄つて其足にからむ。三次はひき戻されて煉る中に、下のかたより捕手二人出づ。)

捕 手。御用だ。

(三次はおもんを蹴放し、捕手の十手をくゞつて上のかたへ逃げてゆく。捕手も追つてゆく。お花は船のなかで、うろくしてゐる。上のかたより伊之助は濡れて出づ。)

伊之助。お、お嬢さん、半七さんは私がひき揚げて、内へ一先づ擔ぎ込んだから、早く行つて介抱してお遣んなせえ。

お 花。では、あの半七は……

伊之助。安心しなせえ、こつちの物だ。

(お花はよるこびて思はず岸へかけ上る。このうちに伊之助は倒れてゐる二人を見ておどろく。)

伊之助。や、誰か倒れてゐる。お、親方におもんさんだ。こりやあ一體どうしたんだ。

(伊之助はふたりを介抱する。お花も寄つて介抱する。)

伊之助。なんだか知らねえが、こゝは私が引受けたから、おまへさんは早く内へ行つてお呉んなせ

え。

お花。 あい、あい。

(お花は上のかたへ駆けてゆく。)

伊之助。 おい、親方。しつかりしねえよ、

吉五郎。 おれは大したこともねえが。妹はどうだ。

おもん。 あい。もし、兄さん。あの三次には今夜といふ今夜は愛想が盡きた。弟を川へ突き落し

……。

吉五郎。 む。

おもん。 わたしを置き去りにして、あの刀屋のむすめを攫つて逃げる料簡、それをわたしに見つけ

られて、訴人の口を塞ぐために……、

吉五郎。 手前まで殺さうとしたんだな。む、もう堪忍がならねえ。まだ遠くは行くめえから、近

所の若え奴等呼びあつめる、

伊之助。 あい、あい。おい、みんな来てくれる。人殺しだ。人殺しだ。

(伊之助は大きな聲でよび立てる。上下より近所の船頭、若い者など大勢、提灯を持ち出て出る。)

おもん。 兄さん、

吉五郎。 なんだ。何だ、

おもん。 かたきを取つておくれよ。(云ひかけていつとりなる。)

吉五郎。 よし、よし。さあ、妹の仇、弟のかたきだ。あの野郎を半殺しにして突き出してくれ。

(おもんは吉五郎に抱かれながら落入る。大勢はわやく云ふ。この道具廻る。)

(三)

舊の網船屋の道具。

(枕もとに屏風を立て、半七は蒲團の上に寝かしてある。お花は介抱してゐる。)

お花。 これ、半七。氣をたしかに持つてたもれ、

半七。 御安心なされませ。もう大丈夫でござります。

お花。 それにしても、こんなに濡れてゐては嘸ぞ冷えるであらう。なにか着せてやりたい。(戸

棚をあけて探す。はて、どこに夜具が入れてあるのやら勝手がわからぬ。

（お花うる／＼して、結局自分の上着をぬぎて半七の上にかけて遣る。）

半七。いえ、いえ、それでは勿體なうござります。

お花。わたしは寒いことはない。これでも少しは凌ぎにならう。

（この時、奥より三次は雪だらけになりて、ぬつと出づ。）

お花。あれ。

（お花はおどろいて飛び退く。三次は半七の上に馬乗りになる。）

三次。一旦かうと思ひ込んだら、執念ぶけえのは俺が持前。さあ、これから一緒に行くか。

お花。え。

三次。いやだと云やあこの野郎を芋刺しだ。（短刀を半七の胸にあてる。）

お花。え。

三次。さあ、料簡をきめて返事をしろ。

（お花は途方にくれてゐる。奥より寅松出る。）

寅松。野郎、こゝにゐるか。

三次。え、手前達も執念ぶけえ奴等だ。

（三次は行燈を蹴倒し、そつと摺りぬけて探りながら奥へ逃げ込む。お花は半七の傍へ探りながら行かうとする。寅松も探つてゐる。この道具廻る。）

(四)

もとの横網河岸。雪ふる。

（三次は早足に出で來りて、下のかたへ行かうとすると、下の方にてわや／＼云ふに、三次は引返して上のかたへ行かうとすると、上の方でもわや／＼云ふ。三次はゆきつ戻りつして、渡し小屋の中にかくれる。上のかたより伊之助は權を持ち出て出づ。）

伊之助。野郎、どこへ行きやあがつたらう。

（左右を見まはしてゐると、下のかたより同心大橋彌太郎、御用の提灯を付けたる捕手數人を連れて出づ。）

彌太郎。

それ。

(捕手は伊之助を取りまく。)

伊之助。

もし、人違ひをなすつちやあいけません。わたくしも三次を探してゐるのでござえます。

彌太郎。

かねて詮議中の黒鷲三次、こゝらにさまよひると聞いたが、そのありかはまだ判らぬか。

伊之助。

なんでもこゝらに隠れてゐるに相違ござえませぬ。

(彌太郎は渡し小屋に眼をつける。)

彌太郎。

あの小屋をあけて見ろ。

捕手。

はあ。

(捕手は小屋の戸をあける。三次は小屋のなかより出で、捕手を突き退けて上のかたへ逃げようとす
る。上のかたより提灯をつけて以前の船頭、若い者大勢出る。三次は餘儀なく引返して、捕手を相手
によるしく立廻り、船へ逃げ込む。こゝらにて板の上に来る。船頭組みつくを川のなかへ投げ込みて、
三次は船の中へ飛び降りる。伊之助はつゞいて飛び込みて組み付く。)

伊之助。

さあ、早く来てくれ。

(捕手は船のなかへ飛び込みて、遂に三次を取りおさへる。)

彌太郎。

それ、引立てい。

(樂屋の頭取出て、先づ今日はこれぎり、めでたく打出し。)

幕

大正十四年九月十五日發行

綺堂戲曲集第九卷
(定價金貳圓參拾錢)

著者 岡本敬二

發行者 和田利彦

印刷者 堀江關武

印刷所 常磐印刷所

著者作檢印



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話大手五二四二一〇)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

Handwritten notes and signatures at the bottom of the page, including the name '岡本敬二' and other illegible characters.

~~1925.9.5~~

11月19日 9日



527
16

終